

「ドナウの旅人」 一問一答

宮本輝氏に「ドナウの旅人」が描かれた背景や取材旅行でのエピソードなど、ミュージアムからの質問にお答えいただきました。

海外を舞台にした作品ですが、ドナウ河流域を舞台にした作品を書くことと思われた動機は。

テレビの短い音楽番組で、サラサーテの「ツイゴイネルワイゼン」が流れて、ハンガリーのブダペストの街とドナウ河が映し出されました。それをたまたま観ていて、何か物語が生み出せそうな気がしたのです。

執筆に先立つ取材旅行には、どなたといらっしゃったのですか。

池上義一さん、さし絵を担当してくれる画家の安久利徳さん、朝日新聞社の担当記者の大上朝美さんです。

ドナウ河にはどのような印象を持たれましたか。

東西ヨーロッパの、民族興亡の長い長い歴史の深さを感じました。人間に人相があるように、川にも川相というものがあって、ドナウ河はとても川相がいいと思いました。



初めてのヨーロッパでの感想や思い出をお聞かせください。

とにかく、生まれて初めての外国でしたから、まさに「見るもの、聞くもの」が新鮮でした。

■驚いたこと

国境の検問所の厳しさです。当時は東西冷戦の時代でしたから。

■好きだった街

旧ユーゴスラヴィアの首都・ベオグラード。現在のセルビアですね。

■忘れられない風景や場所

雨の降る夜に着いたブダペスト東駅のプラットホームで最初に目にしたジプシーの人々の暗い目です。とにかくたくさんあります。

■思い出深い食べ物

旅を終え、ルーマニアのブカレストからドイツのフランクフルトに帰って来た夜にイタリア料理店で食べた「ヴェイトロ・トゥナート」という料理。こんなにおいしいものがこの世にあるのかと思いました。スライスした子羊の肉をまぐろのソースに三日間漬け込んで作るそうです。

■大変だったこと

大変なことだらけで…。でもやはり、ビザなしで、

旧ユーゴスラヴィアの国境の町ネゴティンから、ブルガリアに入国する際の出来事です。

それはそっくりそのまま『ドナウの旅人』に書いています。

執筆から20年以上が過ぎた今、もう一度訪れてみたい都市や場所がありますか。

旧ユーゴスラヴィアの首都・ベオグラード

旧ユーゴスラヴィアのいなかな町・クラドヴォ

クラドヴォからネゴティンへの延々とぶどう畑がつづくいなかな道。ぜひまた行きたいですね。

肥沃な美しい土地と人なつこい純朴な人々とまた逢いたいと思います。



初めての新聞連載作品ですが、それまでの執筆活動との違いはありましたか。

とても緊張しました。大変なプレッシャーでした。とにかく、毎日毎日、こま切れで長い小説がつづいていくという仕事の進め方がわかりませんでしたから。それと、連載中は絶対に病気をしてはいけないという大きな責任感を持ち続けていました。お陰で風邪ひとつひきませんでした。

登場人物の中で、特に思い入れの深い人物はいますか。それは誰ですか。

しいてあげれば、ルーマニアのさいはての町に登場するダリンク少佐でしょうか。あのような人物はいささかでもモデルとなる人を見たわけではない、まったくの架空の登場人物なのですが、私はなぜかあの軍人が好きなのです。



提供:ルーマニア大使館



提供サイト: <http://www.s-hoshino.com>

主要な人物に外国人が含まれていますが、外国人を描くのに、苦勞された点などありましたか。

私は日本的な考え方でしか外国人を書けませんでした。後年、軽井沢の喫茶店で偶然に評論家の加藤周二さんとお逢いしたとき、加藤さんは『ドナウの旅人』を読んだ感想を述べて下さいました。「あなたは外国というものに、まったく臆していないね。」と仰言いました。そのときは、「褒められた」のか「けなされた」のかよくわからなかったのですが、あとになって、芸術的なくらい遠回しに「あきれられた」のだと思いました。

国境付近で「日本人がめずらし」くて、人が見にくる。みんなに知らせるといふ場面がありました。訪欧の際、宮本さんも「めずらしい」と困まられたりされたのでしょうか。

あれは実際に起こったことを忠実に再現しました。

日本ではあまり実感することのない「国境」には、どんな印象や感慨を持たれましたか。

地つづきの国境というものを日本人は体験したことがありませんので、そのつと、とても緊張しました。銃口なんて向けられたことがないので、やはり、怖かったです。

もしも一人旅をするならば、どこを旅したいですか。旧ユーゴスラヴィアのいなか。

宮本さんにとって、これは絶対に旅の必需品！外せない！というものは何ですか。

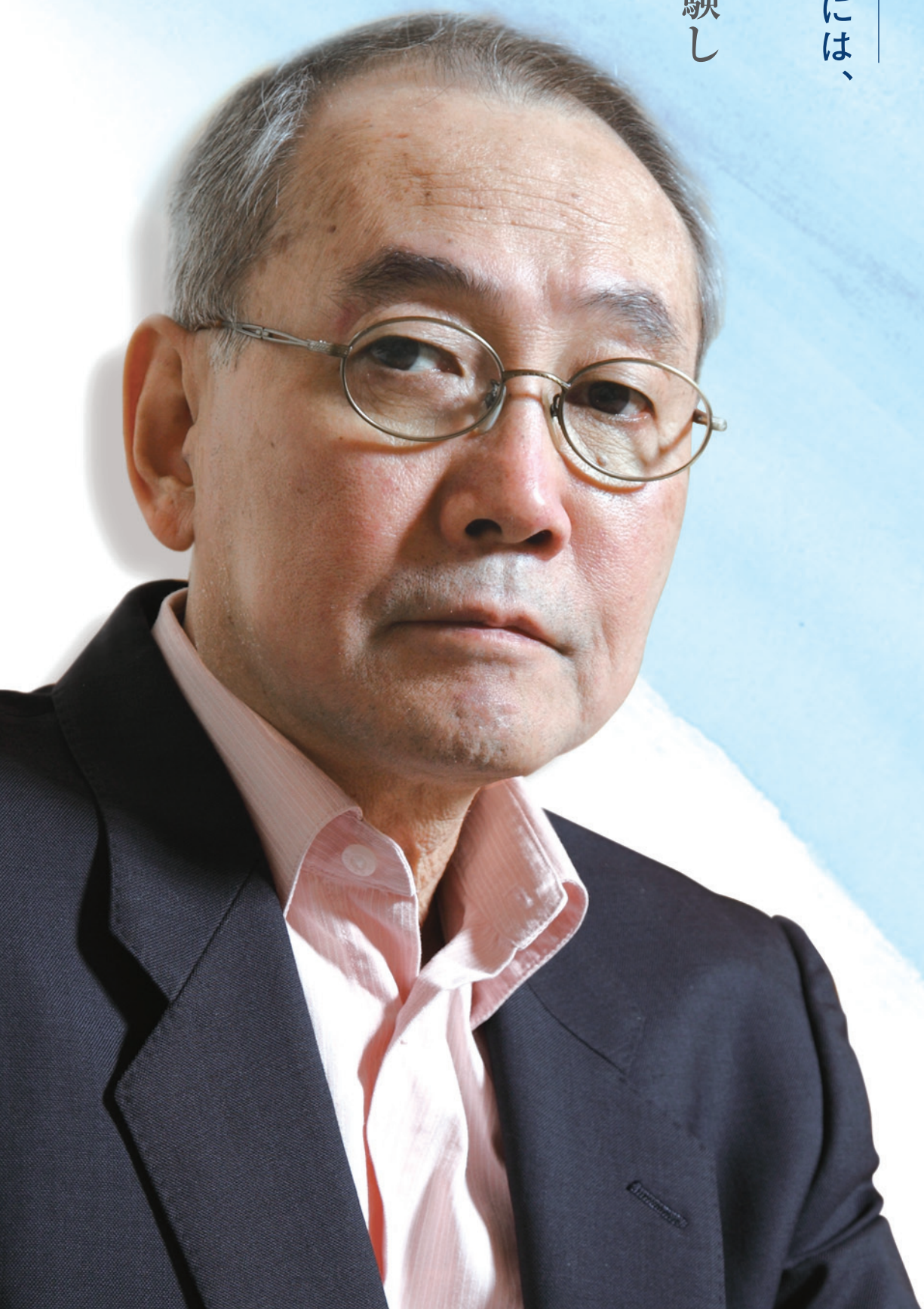
正露丸

次に海外に取材旅行に行くとしたら、どこに行きたいですか。

モロッコ。南フランス。トルコの地方都市。

取材旅行から日本に戻られた時の感想はいかがでしたか。

生きて帰れたなアと思いました。



宮本輝

2010年5月